

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第932号 平成27年5月19日

神々と男たち

私の友人から、1本のDVDをお借りしました。それは、「神々と男たち」と題するフランスのドラマで、1996年に実際に発生した武装イスラム過激派によるフランス人修道士の殺害事件を取り上げたものです。

舞台は、アルジェリアにある鄙びたカトリックのアトラス修道院です。

そこでは、8人のフランス人の修道士や医師が地元で融けこみながら生活しています。

やがて、修道院からさほど離れていない荒野で、イスラムの過激派によるクロアチア人の殺害事件が発生し、修道院周辺にも危険が迫っている事を感じさせます。

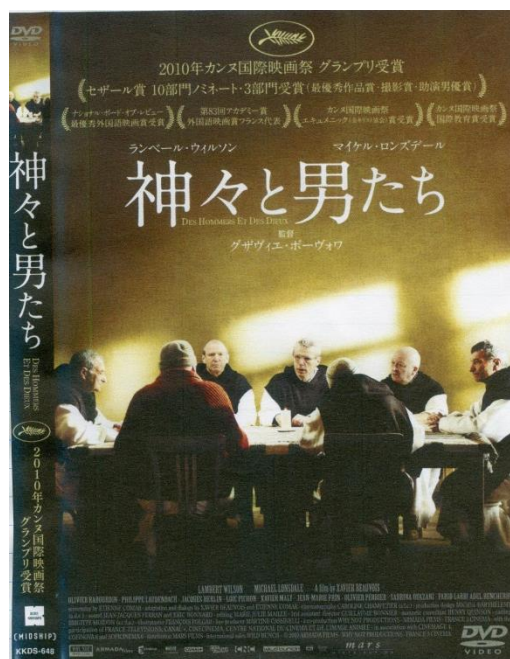
クリスマスイブに武装した数名の過激派が修道院を訪れ、彼らから医薬品の提供を求められるのですが、それ以来、修道院はアルジェリア軍と過激派との紛争に巻き込まれて行きます。

フランス政府からは修道士達に帰国要請が出される事態となり、彼等はここに留まるべきか、安全のために帰国するべきか心は乱れます。何度も話し合いを重ねた結果、フランス政府の帰国要請にも応じる事なくなんとか生き延びようとするのですが、遂に、過激派の襲撃を受け、彼等は拉致され、やがて殺害されてしまいます。

このドラマは、一連の顛末が、リアルに、しかし、抑制の効いた形で表現されており、それだけに修道士達の苦悩が一層際立って伝わって来ます。

イスラム過激派は、何故地域の中で人々と共に暮らし、人々の生活の支えにもなっている修道士達を拉致し、殺害したのでしょうか。イスラム過激派のそうした理不尽な行動は、何を意味しているのでしょうか。正直私には良く分かりませんが、一ついえる事は、既存の価値観、つまりイスラム過激派からすれば相容れない思想や価値観に基づく現実を破壊しようとしているのではないかという事です。

地域の人々の貧しい生活を支える修道士達の活動が、如何に信仰に基づく善意の発露だとしても、アルジェリアの貧しさは、かつてこの地を植民地として統治して



きたフランスのせいと考えるイスラム過激派からすれば、修道士達の存在はフランスを想起させるものだったともいえるでしょう。

私は、暴力と破壊は新たな憎しみの連鎖を生むだけであり、暴力と破壊によって建設的で平和な社会を作る事は出来ないと考えますが、一方で、破壊する事無しに新しいものを作り出す事は出来ないと考える人々が存在する事も確かです。

地球は今、そうした様々な考え方がせめぎ合い、ぶつかり合う中で、かつて経験した事の無い程に混迷を深め、喘いでいます。

さて、フランス政府から退去するよう指示された修道士達は、自分達に与えられた使命を果たすためこの地に残るべきか、それとも、最悪の事態を避けるため避難すべきか、一人一人が逡巡し、苦悩を深めます。

修道士の中には、フランスに帰りたくても帰る場所のない者もいます。自分は修道士として一生を終えるしかない。しかし、死への恐怖は抑えがたい、その狭間で懊悩する姿こそ、私には崇高に見えます。その人間臭さは、修道士達の尊厳を少しも傷付けてはいないと感じます。

最後は、修道士全員心を一つにして残る事を決めます。

覚悟を決めた後の最後の晚餐、時間だけが、沈黙の中で静かに過ぎて行きます。

観終わった後で、私は、「お前は覚悟を持って生きているか」という厳しい問いを浴びせられたように感じました。

(塾頭：吉田 洋一)